

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720057

研究課題名(和文) 18～19世紀ドイツの鍵盤楽器教授に見る鍵盤楽器奏者の多様性とその史的展開

研究課題名(英文) Historical Study on Diversity of Keyboard Instrucion and Player in 18-19c. in Germany

研究代表者

小野 亮祐 (Ono, Ryosuke)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10611189

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：近代ドイツでの鍵盤楽器音楽、奏者、教授は、時代が下るにつれ超絶技巧化していく方向で見られていた。確かにそのような側面がある一方で、当時の超絶技巧ピアニストがならずしもその範疇では収まらない(例えばオルガニスト)活動をしていることに注目し、より豊かな鍵盤楽器奏者及び教授の諸相があったと考え調査を進めた。

そのために、これまでに研究資料の対象となっていた教則本ではなく、教授に使われた手書きの資料、教員養成学校における音楽教授資料および教会音楽家に関する一次資料、雑誌・新聞記事、音楽を教授する学校の資料を調査し、従来とは異なる多様な鍵盤楽器奏者や教授のあり方を明らかにできた。

研究成果の概要(英文)：Recent historical music studies see the Keyboard-instrument's Instruction and player in the modern era as virtuoso. On the other hand, a pianist in the time had not only activity of virtuoso pianist, but another one (e.g. some of that ware Organist, too). On the fact, I researched on diversity of the Keyboard-instrument's Instruction and player in modern time Germany. I researched especially into music-educational manuscripts, records of musical education in the normal school, and musical magazines. With this research I could prove the diversity of keyboard-instruction and player.

研究分野：音楽学、音楽教育学

キーワード：鍵盤楽器教授 ドイツ ピアノ オルガン 教会音楽 教員養成学校 バイエル

1. 研究開始当初の背景

19世紀以降の鍵盤楽器奏者と鍵盤楽器教育の関連と実態については、誰もが知るF.ショパンやF.リストといった超絶技巧ピアニストの登場や、C.チェルニーなどによる技巧に特化された練習曲集の存在により、一義的に超絶技巧の世界と理解されてきた。しかし、そのような鍵盤楽器奏者であっても、必ずしも超絶技巧のピアニストであっただけではない。例えば、リストはそのようなピアニストとして著名であったが、一方でオルガニストでもあった。

本研究が対象とする18～19世紀ドイツの鍵盤楽器教授の研究については、エチュードに焦点を合わせているため、結果としてエチュードの楽曲分析的研究および、その上で教えられたテクニックの内容にとどまっている。また、このような研究が対象としているのは、いわゆるクラシック音楽の担い手としての高級文化にとどまっている。一方で19世紀以降次々と設立される「組織的な教育機関」についての研究は、超絶技巧にとどまらない各学校における鍵盤楽器教授の多様性を示していた。

2. 研究の目的

1の研究背景を踏まえると、当時のドイツの鍵盤楽器奏者や教授活動は、超絶技巧的な視点からではとらえきれない、多様な諸相があることが予想される。

そこから本研究では、従来の教則本や高級文化としての音楽を中心とした視点ではなく、他の音楽教授にかかわる資料を基にして、より多様な鍵盤楽器教授や鍵盤楽器奏者のありようを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

従来の研究が取り扱ってきた教則本以外の鍵盤楽器教授の実態に関する一次(楽譜)資料、従来の通念と異なる教則本の補完的収集、組織的な音楽教授施設での教授活動にかかわる資料、音楽家の採用などにかかわる公文書に記載された履歴などを収集することにより、上記の目的を達成することとした。また、このような多様な鍵盤楽器教授が、洋楽黎明期の日本の明治期において、どのように移入されたのかを、特にドイツにオルガン専攻で留学した嶋崎赤太郎の研究を介して探ることとした。

4. 研究成果

(1) 教則本以外の教授資料として鍵盤楽器教授の内容を持った手稿譜を発見した。教師と生徒との間で行われた教授の過程が反映された資料であるが、その内容は教則本的な内容も散見されるものの、その多くは舞曲であった。また、鍵盤楽器の教授が主要な軸となりつつも、歌曲や他の楽器の楽譜が混在しているなど、ジャンルや習得楽器などの点で

も多様に当時は行われていたことが分かった。

(2) 組織的な教育機関についての調査については、教員養成学校について焦点を当てて調査研究を行った。そこで行われた音楽教授は、オルガン、ピアノ、弦楽器、通奏低音など多岐にわたるものであり、これは18世紀～19世紀を通して、学校での音楽の授業及び付随する教会の音楽家としての職務を行うための音楽教育でもあった。このことは、同時代の教会音楽家・学校教師の採用・職務に関する資料研究においても同様な傾向が見られた。

18世紀以前からオルガニストが学校の教師を兼務することは見られたことであるが、徐々に世俗権力の公教育制度に回収されていく中で、いまだ19世紀においてもピアノだけではなくオルガンをはじめとして広く音楽を学ぶなど、その独特の多様性が明らかにされた。

(3) 日本と19世紀ドイツでの鍵盤楽器教授の関係を明らかにすべく、オルガンを専攻した早期の音楽留学生、嶋崎赤太郎の留学中に受けたオルガン教授と、帰国後のオルガン教授の実態について調査した。その結果、嶋崎の受けたオルガン教授は、ドイツの教会オルガニスト教育の延長にあるものであったが、日本においては調査できた明治期～大正初期の彼のオルガン教授ではそれが反映されたものではなく、当時はそのままドイツの専門教授法をすぐさま移入したわけではなかったことが分かった。

(4) この分野の研究手法についても批判的なレビュー研究を行った。以上の研究を見ても明らかとなっており、この類の研究では従来の音楽史で取り上げられてきたような著名な音楽家の作品をめぐるものではない。このことから、19世紀以降の大作作曲家とその作品本位の価値観に基づいて設計された資料の検索システムでは、本研究のような無名の人々による大きな文化的潮流を解明することを難しくしている。検索システムを支える資料研究が、ジャンルやその楽譜の用途などといった視点からも、詳細かつ網羅的に調査をすることが必要である。

(5) 教授資料の検索の中で付随して、当初の本研究の予測を超える研究成果を出すことができた。それは、『バイエル・ピアノ教則本』の自筆譜の発見である。この点については、すでに以前から『バイエル・ピアノ教則本』の初版研究を綿密に行っていた多田純一氏と合流し、初版譜との比較、また初版を出版したドイツ・マインツにあるショット社の出版台帳記録などを参照の上、その詳細を明らかにした。加えて、『バイエル・ピアノ教則本』が出版された当時は、ドイツのみな

らずヨーロッパ、アメリカに至るまでのベストセラーであった。従来明治期初期の『バイエル・ピアノ教則本』移入は、アメリカ経由の、先進国から後進国への一方的な移植のように受け止められてきたが、そうではなく、日本への移入は世界的な「バイエル現象」の一部であると結論付けることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

小野亮祐 18 世紀～19 世紀ドイツの手稿譜における教育的内容についての資料研究 1 ～ドイツ・アルテンブルクに残された手稿譜に焦点を当てて～『北海道教育大学紀要(教育科学編)』(北海道教育大学) 査読なし 第 66 巻 2 号 p.191-201 2016

小野亮祐 18 世紀～19 世紀前半ごろのドイツにおける音楽教授の諸相とその研究手法について『釧路論集 北海道教育大学釧路校研究紀要』(北海道教育大学釧路校) 査読なし 第 47 号 p.149-156 2015

小野亮祐 多田純一 『バイエル・ピアノ教則本』École Préliminaire de Piano の初版について - 複数の初版とその版数および刷りの解明 『北海道教育大学紀要 教育科学編』 査読なし 第 66 巻 1 号 p.195-205 2015

小野亮祐 ドイツのオルガン教授と洋楽黎明期日本との接点についての試論-島崎赤太郎の「オルガン留学」を通しての検討-『関西楽理研究』(関西楽理研究会) 査読あり 第 30 巻 p.46-56 2013

小野亮祐 鍵盤楽器演奏の難易度についての歴史的考察 - 「静かな手」について『釧路論集 北海道教育大学釧路校研究紀要』(北海道教育大学釧路校) 査読なし 第 45 号 p.93-98 2013

小野亮祐 18 世紀鍵盤楽器教授のお悩み相談 - J.G. プッフホルツの『音楽教授問答集』より - 『音楽文化教育学研究紀要』(広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育學講座) 査読なし 第 25 巻 p.77-81 2013

[学会発表](計 5 件)

小野亮祐 19 世紀ドイツの手書き楽譜を読む その教育目的と構成 日本音楽教育学会北海道地区例会 北海道・札幌市 2015 年 8 月 2 日

小野亮祐 多田純一 『バイエル・ピアノ教則本の自筆譜調査について』 - マインツ・ショット社史料室での調査について - 日本音楽表現学会第 13 回大会「美ら島大会」 沖縄県・那覇市 2015 年 6 月 21 日

小野亮祐 ドイツ・アルテンブルクに残された 19 世紀初めの手書きの音楽教本について 日本音楽教育学会北海道地区支部例会 北海道・旭川市 2014 年 8 月 2 日

多田純一 小野亮祐 ベルリン国立図書館所蔵の『バイエル・ピアノ教則本』について 複数の初版を比較して 日本音楽教育学会全国大会 青森県・弘前市 2013 年 10 月 13 日

小野亮祐 ドイツのオルガン教授史研究 島崎赤太郎を中心とした、洋楽黎明期の日本のオルガン教授に至るまで 日本音楽教育学会北海道地区例会 2012 年 8 月 4 日 北海道・札幌市

[図書](計 1 件)

小野亮祐、多田純一、長尾智絵、監修：安田寛 音楽之友社 『「バイエル」原典探訪 知らざる自筆譜・初版譜の諸相』 2016 p.3～5、p91～93、p.94～97

[その他]

安田寛 小野亮祐 Web 連載 『バイエルの謎』その後～無自覚な音楽史 (音楽之友社サイト

http://www.ongakunotomo.co.jp/web_content/bayer_sonogo/index.html : 現在も連載中)

第 1 回 はじめに バイエルの謎とピアノ奏法の「絶対矛盾」(2014 年 5 月)

第 2 回 「バイエル・ピアノ教則本」の重要なキーワードについて(2014 年 7 月)

第 3 回 ベストセラー著者レーラインに嫉妬したエマヌエル・バッハ(2014 年 9 月)

第 4 回 「静かな手」と「ねこ踏んじやった」の奇しき関係(2014 年 12 月)

第 5 回 バイエルの真価の歴史的解剖(2015 年 2 月)

第 6 回 バイエルの真価の歴史的解剖その 2 - 番外曲のルーツを訪ねる(2015 年 4 月)

第 7 回 バイエルとミュラーのピアノ教則本(2015 年 6 月)

第 8 回 バイエルの現在する唯一の書簡(2015 年 9 月)

第 9 回 バイエルはなぜ編曲家になったのか(2015 年 11 月)

第 10 回 バイエルのライプツイヒ時代(2016 年 1 月更新)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

小野 亮祐 (ONO, Ryosuke)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10611189